

純愛中毒

2004(平成16)年11月27日鑑賞<OS 劇場 C・A・P>

★★★★



監督=パク・ヨンフン/出演=イ・ビョンホン/イ・ミヨン/イ・オル/パク・ソニョン
(エスピーオー配給/2002年韓国映画/114分)

……イ・ビョンホンを、「ヨン様」ことペ・ヨンジュンと並ぶ人気スターにした『純愛中毒』は、儒教的道徳観が今なお強く残る韓国国内では「背倫」「狂気の愛」と評された映画。しかし、いいものはいい！「禁断の恋」だからこそ、より深く、よりスケールの大きい愛に育つ可能性も……。『誰にでも秘密がある』(04年)での軽妙なイ・ビョンホンとは全く異質の熱演に拍手。しかしそれ以上に難しい役どころのヒロインを演じたイ・ミヨンはすばらしい。「韓流」はホントにすごいと実感！

たまたま同時上映！

『JSA』(00年)、『純愛中毒』のイ・ビョンホンと、『冬のソナタ』『美しき日々』のチェ・ジウという夢の共演で人気沸騰の『誰にでも秘密がある』(04年)が公開された2004年11月27日(土)の午前10時15分前、OS劇場の前は女性客の長い列。いるわいるわ、若い女性からオバさんまでオンナでいっぱい。昨日、東京を訪れた「ヨン様」ことペ・ヨンジュンの乗った車にファンが殺到したため、転倒するなどして約10人が負傷するという事故が起こったのもわかるとうもの。

そんな中、私は「感動韓国映画特集」3本の前売り券を購入していたため、その中の1本であるこの『純愛中毒』を同日午前10時から鑑賞した。さすがにこちらはほぼ半分の入りで、ゆっくりと観ることができた。私は『誰にでも秘密がある』は、既に10月26日に試写室で観ていたので、そこでのイ・ビョンホンの軽妙なノリの演技とこの『純愛中毒』での重厚な(?)演技を比べてしまったが、こ

これは本来は逆。なぜなら、この『純愛中毒』が先、『誰にでも秘密がある』が後の作品だから……。

「韓流」純愛ドラマの良さはテーマの明確性と登場人物のシンプル性

『誰にでも秘密がある』のポイントは、それぞれに異なる三人姉妹のキャラのぶつかり合い、そしてこれを前提として突然登場してきた理想的な男性と三人姉妹それぞれとの「FALL IN LOVE」の様子面白さ。それを実に軽妙かつドラマティックに表現したこの映画にも感心したが、この『純愛中毒』も、まずは登場人物が少なくかつそれぞれのキャラが明確。そしてテーマは、『誰にでも秘密がある』とは全く異なる「禁断の恋」、というよりも儒教的価値観が強く残る韓国では「背倫」「狂気の愛」と評された難しいものだが、このテーマも明確。

約2時間の上映時間内で観客を魅了するには、何よりもわかりやすいことが大切。その意味において私は韓国版純愛映画(?)の良さは、テーマの明確性と登場人物のシンプル性だと思う。

冒頭20分の理想郷?

冒頭約20分間で描かれるのは第1に、夫ホジン(イ・オル)と妻ウンス(イ・ミヨン)のホントに幸せそうで理想的な夫婦愛。そして第2に、兄ホジンと弟ジン(イ・ビョンホン)とのこれも理想的な兄弟愛。ホジンとウンスの仕事や生活のスタイルは日本における標準的なサラリーマンの家庭とは異なるし、弟ジンの生き方にも多少屈折したところがあるようにみえるが、ここに描かれるこの2つの関係は、韓国社会ではもちろん、どこの国でも理想的なもの。

この映画のミソは、この3人が1つの屋根の下で生活していること。外での仕事が忙しく、結婚記念日を忘れていた妻がプレゼントをしてくれた夫に対して、「今夜はベッドでサービスするから」とか、兄から弟へ「今夜は耳栓をして寝ろよ!」と話せるような3人同居の家庭は、たしかに理想郷かもしれないが、そう長続きはしないのでは……?

20分間もホントに幸せそうな3人の同居生活を描いたのは、次にこれを地獄につき落とすための伏線……?

天国から地獄へ

この3人の幸せな生活の中に、レーシングカーが恋人のようなテジンに対して一方的に恋している女性エジュ（パク・ソニョン）が登場するが、これも後半に向けての布石であることは明らか。レースの練習のたびにいつもちょっと無茶をしているテジンを見ていると、その後の不幸が見えてくるようだが、同時にホジンの身にも不幸が襲うとは……？

そう、あれほど幸せだったウンスが天国から地獄へつき落とされることになったのは、同じ日の同じ時刻に、テジンはレース本番中の事故によって、ホジンはこのレースに急いでかけつける時のタクシーの事故によって、2人とも意識不明の重体になるという突然の不幸に襲われたためだ。

まさに天国から地獄へ。さあ、ウンスはこれからどう生きていくのか？ そしてまたエジュは……？

ヒロインの熱演に拍手！

ホジンとの結婚生活に満足し、家庭でも職場でもいつも明るく、のびのびと生きてその実力を社会的にも発揮していたウンス。

あの忌まわしい事故から1年後、やっとテジンが昏睡状態から覚めたことに喜ぶながらも、自分はホジンだと主張するテジンに対して、戸惑いを感じ混乱していくウンス。

そして、本当にホジンの霊が乗り移ったかのようにホジンと全く同じ行動を示していくテジンに対して魅かれながらも、あくまで義弟と姉という立場を守るために苦しむウンス。

しかし、ある日、ある時、ある出来事によって、それが一挙に崩れさり、2人は男女の激情におぼれていくことに……。そして、さらにその後も……。ここらの展開が儒教的道徳観からみれば、賛否両論に分かれるのは当然か……？

登場人物が少なく、テーマが明確だということは、逆に俳優の演技力の見せどころともいえるが、これほどさまざまな変化していくヒロイン、ウンスの姿を表現するのは至難のワザ。しかし、韓国の国民的女優イ・ミョンはこのヒロインを

見事に演じている。イ・ミヨンがこの作品によって韓国の最高の賞である第40回大鐘賞最優秀主演女優賞を受賞したのも、なるほどと十分納得できるもの。

ハッピー・エンドかと思ったら……？

兄の霊が弟に乗り移るという奇妙な現象をいくら医者から説明されても、そう簡単に納得できるはずはないうえ、それを前提として、ウンスがテジンとの生活を組み立てていくことなど到底不可能。ましてやテジンは今も植物人間状態で眠り続けているホジンの弟なのだから、いくら義弟の中にホジンの霊が移っているといわれ、テジンの行動や意識がホジンと同じであったとしても、そう簡単にそんな状態を受け入れることができないのは当然。さらに、テジンの恋人のエジュも、テジンが無事生還(?)したことを喜び、2人の愛を育もうとしているのだから……。

しかし、この映画はそんなこんな困難を乗り越えて、テジンとウンスの2人が美しく結び合うところが最大のハイライト……。さらにウンスは妊娠。さあ、これでめでたしめでたしのハッピーエンドかと思ったら……。

数々の伏線と余韻を楽しもう……

この映画は決して『誰にでも秘密がある』のような軽いノリで観るものでもないし、「韓流」純愛ドラマの1つとしてうっとりと涙するだけの映画でもない。ネタバレになるので詳しくは紹介できないが、ストーリー展開においては数々の伏線が仕掛けられている。そしてまた、テジンの恋人(?)エジュがさまざまな形で3人の関係の中に入り込み、複雑なバリエーションを生み出している。私のいつもの感想である、「やっぱり女はコワイ!」と思わされる場面も……。

その結果、この『純愛中毒』は単純な純愛ドラマではない、「深み」と「すごみ」を見せる重厚な作品に仕上がっている。さあ、ネタの小出しはこれくらいにして、あとは皆さんが自分自身でこの映画の数々の伏線と余韻を楽しんでもらいたいものだ……。

2004(平成16)年11月27日記